



大和國筒井清水
卷之五

檀勘左衛門誠忠傳
濱松奇國著
淺山芦園画

13
3175
5



門 へ 13
3175
5

大和國筒井清水卷之五

九回 審書

浪華 濱松教國 編集

却後山郷助ハ猪隈丹下と云ハ一合也。系本既述の武士
ハ、猪隈と一味の本事なまをば、順秀ハ殺害せんハ、囊のうらの
氣分とるよりも、公安一とかりひしよ、乃及松念伊波おに
丹下ハあくなく、赤果と凡頂まう條斗、誦語さ。りや
猪隈よまへ、刀より、おん、及ぶるもやあらんか。
大ひよあやぶ。丹下ガ死骸と、おまども、若かり、
此も、おん、奇ち、此、首、被、首、と、と、ら、り、求、る、如、の、
此、首、被、首、と、と、ら、り、求、る、如、の、

筒井清水卷之五

昭和九年
九月二九日
購求

遊人びあつて先別一人の武人ありて。屍ハあれあの
 炭林の徑へ埋も。刀以奪ひとりて。ゆらまゝと毒細紙
 けりし。南をこまをほくし。ゆりのまじりしと。悔む
 甲斐なくしと。直よ山田の庄はゆらうら。ぬいのぐと
 内より。獨助を頼まよ。向ひお中の容よと。ゆら丹下
 賜りし。まゝ君の御指料と奪ひとりし。武人ハ行者や
 ともぼろか。と。顔よ土のぶく。ゆらて。迷くれ。頼ます
 こ。しも。初。其。武人。も。た。う。と。お。念。伊。織。な。ら。ん。
 深。が。方。う。り。後。按。と。と。指。出。さん。その。先。よ。ま。ふ。が。鉄。へ
 盜。賊。忍。び。入。り。松。花。の。刀。と。奪。ひ。取。し。と。被。あ。ま。り。是。お

ま。と。炭。林。の。裏。へ。埋。ま。た。る。丹。下。が。死。後。の。懐。中。へ。伊。織。が
 偽。手。の。書。向。と。入。り。却。て。深。と。罪。は。隨。う。ん。斗。略。あり。
 僥。倖。せ。り。偽。手。の。め。を。ほ。く。う。ん。伊。織。が。手。と。知。り
 た。ま。へ。我。業。文。の。ぶ。く。ま。ら。う。め。ら。う。と。よ。と。指。出。し。て。獨。助
 小。書。と。ら。ま。ふ。ま。偽。手。の。名。人。も。及。風。矢。野。が。手。り。か。と
 いつ。じ。も。一。ま。を。さ。し。も。遠。い。や。偽。と。う。す。る。れ。け。り。の
 若。も。う。ま。書。と。ら。ま。ふ。か。ら。疑。く。る。ぬ。頼。ま。は。仕。渡。した
 了。く。獨。助。小。書。の。う。り。とい。い。合。り。其。文。ハ。筒。井。の
 懐。中。よ。ま。ま。獨。助。と。伊。織。の。偽。書。を。持。て。密。に。丹。下。が
 死。後。と。埋。し。知。る。ま。ら。う。と。管。さ。く。と。炭。林。の。裏。



三



ままば人々が密討に終りし事ぬ山田頭まは筒井
 清次は對面してを暖の孔を穿てて居りて「おれ
 系が室に飛へば滅びぬ」秘藏の刀一振とうとう
 一へへは今の間一家中ハ小及ぶに公あつたのふと
 とあるとつてもいままおれまどれど這盜賊ハ敵の素因
 小妻一に老の所おとせえりとも殺ぶりてはては
 けい少時目通つとをきざけりともは松倉伊織おれの
 働も小つとつた事とも系が老公の程と成トつて今日
 より出勤と免とを膳房より在りて山田清次は盜賊の
 為の秘藏の刀を奪ひてとあるとつてもいままおれまど

去さざれば刀と竹細くして狼籍者の陰謀ありは災い
 甚多よ及はん事ぬ思ふ事ぬ影の傍りよりあるべし我々
 ぞおれの強勅の保く包とつて一と願ふどの刀は我方
 花一もせんもなつては免あつては君の花街のいと
 白比よいひ出がとつてとあるとつてもいままおれまど
 是出く思ふ事ぬ其所刀の義とあるとつてもいままおれまど
 りふらりて控まらうけは君の心ありとあるとつてもいままおれまど
 りくも何れぞ御機嫌とつてせうとつてもいままおれまど
 とおれまど毎おれまど及んで系清はるおれまど途中よ
 小のめく狼籍者よ出合只一カ小女控彼者がせうけり

又るふびまを君の秘藏より一振をお返あしむる由へ
 密うふるく降りしが依り山田の所領へ君び入る刀を奪
 一は秘藏よりいひしづたの如くぞしと死骸をさすうす
 おうい土人の怨義とならば茂林の裡に埋まらむとやと
 けとらぬ順ま大いよ殺さるるを糸うて其方の働さよ
 くのくは秘藏と付る秘藏の刀はさういふせしは
 形く速く秘藏にうりてお糸せよまは秘藏の死骸も
 今う一返あらうとあえん館の案内を知らるハ行ぬらんと
 廣くお僕よ命どと茂林のうらうらる死骸を掘出させけ
 るよぬまのようたるこしるまをば被死骸の懐にあはし

仍舊の密書者かえりてお僕が持歸ると伴織が秘
 藏より刀はさすうて掘出すと日付する願まは秘書
 何なるに体よく書面とお披きして読まの文よ
 秘書一巻書とりつてPさういひせん日とくおふい合
 せ一通り書殿思秘は少とけうまののるるに
 秘書力量持まさるふ由へ秘書者が行秘もふりい
 秘書者よと密書者よあはれお下さるる千方糸は合書
 なるまらりいひし折紙を念山田領ま及の館へ
 入秘書者の刀殺す所持の内は秘書後日の伴織とあは
 諸人の目立は秘書の刀一振掘出し秘書人お書との毎お

津井清丸の陣中へ忍び出て本所の尾街小通の
うへ途中に待伏しそ尾殺害す。下さるる
小刀が尾殺行方へ忍びも退り下。まどろく文
いそめ言左右と待たまひくはるる法中
中一味とせとる。頂永と殺害小及び一頂春
のふおろり。修徳の刀を明白すと終山田氏と
もふとあじ。三宝山は尾居ある頂永もくはる
尾井家の平次大和守國と押しのつとまの
もつとあはる。尾とあはる。けまの傷もあはる。一
のこめ如しのいふはるる。

二月日

松倉伊織

友春
五

掃隈丹下

とつとより尾殺大いよめ。伊織に向ひ罵る。やう海軍の
家尾としておあはるる系が敵へ。盗賊と思はせ。秘蔵の刀
奪ひとるのこめ。天地ふも換ごる一人の物。尾殺
殺害させ。おあはるるとか。おはせ。我をもつたりのせ
んと斗る。極悪人とやい。人非人とやい。人の
を企るとい。日月地は随ごと。忽地這密書ら
る。尾殺の上は。沈むる。おあはるる。尾殺は。おあはるる。

法を以て松倉伊織をたがうとす。自ら書きたる
 書あり。いふもおのまも尋く。くわりの信をうらむ。因
 答程縁の体と見え。一々信人のまひに任せ。し
 領も連らう。信同とぞ。生約信五を連つ。纏りけりし
 下知。よつれ。畏まう。ていし。信五を連つ。手紙下さんと
 上より。順秀公。生約とぞ。あて。松倉よ。向らせ。い。汝との密出せ。
 徳め。くる。ま。る。た。や。と。あ。ふ。市。行。よ。ち。ら。う。い。い。ま。ふ。あ。る。あ。ん
 多あり。ま。が。い。い。う。で。あ。る。不。忠。の。初。状。以。信。ら。う。と。ま。よ。ま。る。あ
 い。と。さ。ご。う。如。ま。う。と。恐。ま。い。言。上。と。順。秀。公。亦。知。い。う。い
 子。信。よ。い。い。う。も。書。ら。る。ま。る。く。あ。ら。う。信。ま。う。ら。う。あ。の。こ

凡仕友の身は人の疾病をまらる。右今治ら。り。か。い。ん。
 付ゆ。い。と。書。面。と。信。ま。う。と。明。白。よ。い。書。く。と。や。往。昔
 周公旦といつる。聖人の成身よ。と。兩。叔。が。後。平。に。墜。入。て。
 昔。時。の。難。と。ま。ら。う。あ。い。い。の。あ。り。況。や。凡。ま。よ。あ。わ。て。と。や。世
 間の人。無。失。の。難。よ。身。と。止。ま。ら。う。あ。る。知。い。う。汝。わ。く
 公。と。我。ひ。公。あ。り。詮。鑿。は。し。不。受。の。悪。名。と。ま。ら。う。と。せ。信。ま
 と。せ。し。者。を。捕。へ。身。の。明。ま。ら。う。と。信。ま。ら。う。と。信。ま。ら。う。と。信。ま
 織。い。忽。也。其。の。う。へ。身。と。抛。ち。出。今。の。市。行。探。地。ま。ま。ま
 り。と。も。君。恩。を。報。じ。ま。ら。う。と。信。ま。ら。う。と。信。ま。ら。う。と。信。ま
 殊。と。ま。ら。う。と。信。ま。ら。う。と。信。ま。ら。う。と。信。ま。ら。う。と。信。ま



下〇



順秀

一言以背くふいあらぬど。狂者の種とるべき曲者と殺
 土中埋し屍。伊織が自らの密書の出さるハ。
 我武運よそざるおる。はくぐ思ふに巡らるるに
 猪隈丹下とやらんらる浪人とうらひ。若くは法の
 多ひ路と氣ひおるんと申す。一と。眠逆の者どもハ
 右んをこの中よえ。命令と厭はず。後ま。丹下が
 生捕しもおぬ。伊織が隠係。白状より入る。丹下
 あらん。と。然とあらざる。せよ。け付し。体し。丹下
 とお控。と。是。丹下も只一人。と。大場。向。狂の
 不敵者。ま。加。伊織と。油。し。て。む。ぬ。

狂者と遠く。後。か。け。明。ら。ま。り。も。倭。智。の。伊
 織。ま。ま。丹。下。が。死。後。と。お。る。と。公。急。が。中。小。我。方
 密書。以。所。持。る。す。よ。公。付。す。備。又。狼。藉。者。が
 帯。せ。刀。の。系。が。指。料。る。と。披。露。及。び。書。面。に。記。せ
 親。と。伯。父。湯。中。の。銀。念。成。生。と。日。士。才。の。目
 滅。と。待。ん。と。子。と。か。と。お。方。ら。る。置。残。り。刀。以。奪。る。と
 今。日。沙。流。と。る。せ。し。由。後。殺。と。い。ふ。と。法。う。こ。も。お。る。虚
 言。以。吐。美。而。日。の。社。へ。系。指。の。途。中。よ。あ。わ。く。取。置。小。生。合。し
 む。と。い。は。偽。り。大。罪。人。あ。り。や。う。小。白。状。せ。よ。と。信。ぞ。と。伊。織
 今。ま。お。取。の。様。子。あ。ら。う。と。小。い。ひ。つ。て。我。方。の。銀。い。ぬ。め。

法胤ぬぎ扇をぬき振へおしあてたのふりて
肩助取あげいざさき至氏内介清とつよより迷く振指
してあへるや肩の落はる。這日のえ糸と又る小介清の刀
振振りさの法はよあまりのゆへ伊織が一刀流突口流のふた
小く一柄取くもみつけ奪いさよの指とみ傷よ及んる
も力を強くと底しつ是より介指と振指もて初つし
津一子代主小守の突ひ州とつひをよさるる武門の恥辱ハ
さすは奥のふみさう其と須秀との令せりましと傳る
家名にひるる悪人の程と悟ましくおひふはつけおんの
士が汚名とまふも自殺よ及びしゆこそ情まうれ初て

山田の敏より、肩井の塚へ中へまらるる松倉伊織を密出の
中ひささおぬがごとく、自らよ切後と遠くと披あしむ。
ぬまき事へゆめぬ

十回 良辰

肩井の塚を須秀との習くしてまよ致びたまはつて
の死よあつての死衛通ひあやむ松倉伊織は汚名
まひせあつて雪士と失ひしも、是もまた我れより記まら
るるゆゑとて、是れと梅ませしも、儲くくその松倉や、
松倉へあひひらまらとどろき既よ本心よ立ゆらまひ、
かゝるべ聖賢の通と友と、生ほぬませらるるゆめぬ



兵部少輔の勅令ありて、高取を蕃の
 嬖臣等も、極に待斗の勲勤とて、
 たる。ともども、悪念は根づか
 ともつ。悪知は後引せしる。傾性
 小中、松原、中、中、中、中、中、
 通す。せうと、切つた。今の
 聖へ付いん。容あつた。計略を
 さん。公永く。所と相待べし。春
 中よりぬ。兼く。玄。内。と。生。

等、順秀云の印を、近く進
 街のかい路と、勅令の
 今、八月十五、お、お、お、
 出、出、出、出、出、出、出、
 順秀云、八月十五、お、お、
 月の様、山、山、山、山、山、
 月、面、面、面、面、面、面、
 秋、秋、秋、秋、秋、秋、秋、
 竜田、田、田、田、田、田、田、

信長公記卷之五

女の住る人衆へも主事おぼやかと七月と書見んとし
 四五字は括まるはまきて初文の比う傳の梢の秋一入
 お淋しくありきおると月みるおよしれもまのうい
 一のちおきのねくろの月の程のりううの秋を待たぬ
 南のさうりううの海ももさうりありきん時天のうら
 縁の里をの庭のうらびやうし街もおやくやさうく
 折れ世の不そふたや庭裏はいらうと茶の葉を葉の
 風とてん神のたけくおんどふ臺田山は鳥ぬけく這
 寂々寒々として月が美人とてうや九きううとて携へし
 酒肴はたせし。身代は寸折しとらうり小女の泣き声へ

りる由えんは怪しむ竹若うやと夢をみるふたどり
 てんまが二ハあやうふええとて女をほくけうめが
 千様の良ふらけら神ハ泪の雨は濡しくは飲もさうり
 けんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん
 不ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 一人然しうんはそふたふとてんてんてんてんてん
 殿はさうの船あがなハ倭布とりて近江の玉の老うり
 十一の年布賣の旅商人は買ふてけ國の人となりしが

うらやまを盡せんとす。下をくはまのほろろお小ふれこ
どもをていひやよきも。年々情をけりて人ぞうらむり
けと荒男の伏櫓の床の流舟せん。殺さぬ女もこそ
誓姫く。編舟のいうもあぬ。ぬるよ。ぬりて引ちり
程よ。主の女房。何と承引もさるや。妬後とらぬに
おま。うらやまは罵らる。とあるよ。一日。主の妻のく備で
られ。とらぬ。思をおりい。情と赤ま。ま。女の内。ゆせ
か。と。情。く。か。と。ど。か。う。お。う。ら。ひ。し。り。ハ。あ。く。妻。の。床
ら。と。し。ゆ。へ。ま。い。た。く。そ。場。を。の。ぶ。れ。徳。意。ハ。保。儀。の。縄。の。端。を。
深。よ。川。と。ふ。刀。と。ち。投。と。刺。り。若。し。は。後。は。後。女。呼。び。ん

とらぬよ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。の。結。も。後。く。う。り。し。と。隣。の。老。女。何。處
云。和。し。命。づ。う。と。助。ら。と。て。三。輪。の。里。と。追。掛。と。ま。ま。ま。ま。
吟。し。い。ま。あ。り。し。り。ど。何。ん。ど。ま。ま。も。あ。り。と。ま。ま。ま。ま。死。と。る。ま。ま。ま。ま。
ど。ま。ま。ま。ま。ま。ま。と。後。ま。ま。が。頭。秀。と。娘。孫。と。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
不幸。なる。か。の。も。ま。ま。の。よ。と。坐。よ。表。と。と。借。と。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
も。け。後。よ。ま。
せ。で。泉。下。の。客。と。ま。
出生。と。あ。ま。ま。が。我。方。より。能。ま。計。ひ。て。あ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
仁。魚。原。と。何。と。何。と。備。れ。し。ま。の。中。よ。い。憐。れ。ほ。ろ。ろ。の
あ。ま。

父母の旧年以その小室しくる。ふよをたたくも。ちかひに
 形くしとやのびよりや。ねくへ帰るても。後の役とたむむご方
 むらねび。只けまうにえやう。久去りても。仮初ならぬ。忍ぶ
 まうこの世よ。まきまきと。出る承らる。報ひ奉らん。勝は却る。羈と
 ぬら。不ぞえ。死後を。恐しう。うらと。おひ切る。形勢よ。ぬ
 去去んと。ねしう。か。あまぞ。わよと。制し。まひ。既よ。赤子の
 井よ。ろ人。と。とる。奴。ア。助る。人。性。の。幸。若。う。て。おれと
 又。控。る。陰。謀。と。損。う。よ。は。似。たり。ね。て。ま。う。の。性。命。ハ。我
 小。ね。け。ふ。新。見。の。者。の。ふ。さ。く。突。立。う。め。さ。し。小。刀。の。痕。お。林
 の。我。思。の。ま。く。徹。ら。破。傷。凡。の。病。と。ら。う。扁。鹊。が。業。う。そ。と

救る。旅。は。ど。ろ。ど。ろ。只。何。の。未。あ。し。う。い。ま。ら。ふ。ま。じ。と。て。
 眠。近。ふ。余。じ。て。膝。よ。思。ひ。せ。月。之。の。奥。も。是。や。が。ぬ。と。
 道。を。速。り。て。帰。陣。さ。し。ひ。ど。り。て。飯。は。焼。つ。ら。ん。と。食
 本。以。と。ろ。り。と。せ。て。居。ん。女。と。し。と。そ。の。ハ。経。糸
 の。下。よ。た。し。て。藤。も。中。も。只。信。よ。命。と。今。う。せ。し。人。と。
 除。切。さ。る。ま。ち。ん。ふ。ん。さ。ん。ふ。い。ひ。る。さ。あ。ひ。ら。れ。ば。倭。布。ハ
 右。竹。の。父。母。の。子。と。離。ま。て。し。う。ま。と。ま。ま。ら。今。日。の。目。と
 身。の。傍。へ。ず。も。別。ざ。る。ま。ま。の。行。よ。良。也。し。紙。と。と。れ。ら
 面。ざ。し。う。ま。び。順。秀。云。も。女。の。公。解。ら。ぬ。ね。び。倭。布。ハ。火。抗
 中。へ。落。へ。ら。と。救。は。ま。さ。る。回。生。の。恩。と。ん。行。は。徹。す。て。さ。く

かりい海たるのこゝへ。倭よやこしれおなづゝかゝる君の毒
 ともありて。終身をまうせてこそ。母は存命らる甲斐も
 めつちとそぞらふありいれ。風浪の晴るぬよ。頭委
 申ん。れりき。教訓の付よ引く。いつころむつれさる
 私言よ。けあとする。おの初めし。互ひは。枕う。い。まの
 濱と。とそお。う。ひぬ。這倭布と。いらる。女ハ。柴が。毫
 田山と。清りし。と。近江の國の。お。う。し。が。十一の。ひ。布。賣の
 旅商人の。も。は。清り。と。ゆ。ふ。ふ。箱の。里。よ。五十。搦。法。九。布。と。て。
 大百姓の家よ。奉ふ。して。人。と。か。る。倭布。の。生。貨。粉。脂。灰
 用い。と。い。づ。も。面貌。清。う。う。う。う。人。ふ。も。残。し。づ。の。と

つとの。月。高。取。去。蕃。家。の。え。い。う。奇。斗。と。巡。し。る。と
 強欲。非。道。の。法。九。布。と。う。う。う。の。女。お。つ。と。山。よ。原。委。を。ぬ。に
 大金と。あり。て。倭布。灰。買。取。を。ま。よ。不。義。と。仕。う。け。と。せ。て。家
 出。女。お。を。す。う。の。よ。辰。と。ま。し。山。と。頭。委。公。よ。一。命。と。助
 り。る。の。と。ぬ。ら。ず。枕。席。と。擇。す。ま。ぞ。の。一。件。と。は。留。ま。ま
 け。身。ひ。う。て。倭布。女。も。ろ。の。よ。知。ら。ざ。ら。知。ら。り。と。い。づ。も。奴
 未。い。ざ。あ。い。ず。苗。時。の。幸。福。い。ま。よ。氏。う。し。て。お。の。樂。よ
 糸。との。世。言。よ。遠。年。儲。ま。と。五十。搦。法。九。布。ま。ぬ。い。ぬ
 け。ぬ。大。金。と。け。ぬ。は。つ。ま。と。う。う。う。ま。ぬ。と。け。密。斗。と。地
 言。と。う。う。う。う。う。

新井乃清水巻五年

